

絆の崩壊

今年の東日本震災より絆とすることが叫ばれています。助け合い支え合つていこうということが合い言葉のようになつていています。しかし現実はどうなのでしょうか。さんざんに今の世の中は絆を分断していく動きに見えてならないのです。それは震災のかなり以前から崩壊していくたと思います。思えばテレビが家庭に入ってきた頃より家庭の中での話し合いや交流が希薄になりました。それでもテレビ一台のうちはまだしも、家族がそれぞれ自分専用のテレビを持ち家族間のかかわり合いもなくしてしまいました。若い方々はもう小学校のうちから携帯電話を持ち、私的な電話を誰にも気兼ねなく話せるようになりました。

これを便利というのか、自由というのか、それとも気兼ねがないと言つことは逆に他への思いやりがなくなつていくようになるのか、何かおかしな感覚になつてします。

他の人とふれ合わなくても、面倒なことがなくとも生きていける世を私たちは創ってきたのです。このことは、ますます進行し、もう電子機器なしでは生活が成り立ちません。

このような社会では生きた人間同士の関係が希薄になつていくことに輪をかけます。テレビ画面の人々はいかにも笑顔で親しげに語りかけてきます。しかしそれはあくまで画面の中であつて生の人間ではありません。寝転がつて見ていたり、食べたり飲んだりしながら見ます。生えをするのを恥ずかしい」と言つたことがなつかしく思います。それはテレビの中の人を生の人と見ていたからなのでしょう。子供の私は笑つていましたが、そんな思いが今は大切に思えてなりません。今の私たちはテレビの中の人間をモノ扱いにしているのです。モノの売り買いが自動販売機になり機械相手にモノと金銭を交換し、「コンビニエンス」は「便利な」という言葉です。が何でも私たちは便利さと交換に人ととの交流を失つてしまっています。貧しい不便な時代には「おかげさま」「おたがいさま」「ありがとう」が、生きていた時代であつたと思います。いやその心がなければ生きていけない時代であつたのかもしれません。戦時中「欲しがりません、勝つまでは」と言つたのが今では「欲しがりましょう、買うまでは」であります。モノの豊かさと人間同士の絆は反比例するのかもしれません。

秋葉原の連續殺傷事件や、神戸の児童殺傷の酒鬼薔薇事件など青少年の重大な事件はすべてが人ととの関係性をなくしてしまったことに原因があるように言われます。ある連續殺人事件の犯人は携帯電話を一台持ち一台からもう一台にメールをしていました。自分から自分へメールするのです。それほど孤絶はつらく悲しいことだつたのでしょう。人間は他とのかかわり合いの中でしか生きていけないのです。絆をズタズタに引き裂くモノはないのでしようか。便利さや電子機器も一役はかつていてるかもしだれませんが、根っこは「私」の勝手な思いが根本のように思います。仏教は「縁起」です。かかわりです。「絆」なのです。便利な世の中、そのことを忘れないで欲しいと思うのです。

「一人で生きている」とか「一匹狼」とは何と傲慢なことなのでしょうか。迷惑かけなきや生きられないのが「私」なのです。